

クスリ場所の絵図

佐藤 宥 紹*

Notes on the map and sketch of Kusuri-place in the Tokugawa Shogunate

Hirotsugu Satō

1. はじめに

本稿は、松前藩及び幕府の蝦夷地政策の変遷のなかで、当地方が絵図や地図上でどのように表現されて、理解の対象となってきたかについて、整理を試みたものである。江戸時代の釧路地方を描いた絵図・地図は少ないのであろうが、知見を得た範囲で、表1のように整理できる。

ひとつの傾向として、松前藩政期と幕府直轄期を比較すると、量的に後者の時期に作製された絵図が多く、質的にも内容的にも、幕府直轄時代の絵図は、豊富な情報を提供しているものとみることができる。松前藩は松前和人地と蝦夷地を明確に分割して支配し、蝦夷地は交易や生産を通じた収奪の対象としてのみ位置づけられてきた⁽¹⁾。これを受け蝦夷地の実情を探索することを制限し続けてきた松前藩の施策と、絵図の作製・流布の過程は、けっして無関係ではない。幕府の二度にわたる蝦夷地直轄は、松前藩の個別領主権を否定し、松前藩にとって化外の地とされる蝦夷地を、内国化してゆく政策であった。それゆえ、蝦夷地に対する調査や政策立案のための実情把握、政策実施過程の記録化などのため、幕府は役人や画家・学者等を投入し、蝦夷地に関する記録の蓄積を行ってきたこととの、根本的な相違がある⁽²⁾。

以上のような蝦夷地政策の背景とこれに伴う文献史料の偏在を念頭に置きつつ、絵図・地図上にあらわれる江戸期の釧路地方について整理を行うものである。

(1) 松前和人地と蝦夷地を区分する政策については、榎森 進「アイヌの支配と抵抗—アイヌ社会の発展・変容と日本封建社会との関わりを中心に—」(『講座日本近世史 2 〈鎖国〉 有斐閣 所収)がある。このなかで「蝦夷地との境界を明確にして一般漁民のアイヌ交易を禁止することによって、封建支配者層のアイヌ交易権を保証し、そしてそのことが、同時にアイヌ民族そのものを当時の社会形態をそのまま維持させながらその社会形態の格差を利用して、最大限の収奪を可能にするという、いわば、和人零細漁民とアイヌ民族の支配と収奪を同時的、かつ合理的に行うための方法として設置されたところにあるものと理解される。」(425頁)。のち榎森 進『北海道近世史の研究』所収

(2) 高倉新一郎・柴田定吉「我が国に於ける北海道本島地図の変遷(一)北日本地図作製史 第四報」(『北海道大学 北方文化研究報告』第七輯、1952)。天明5、6年の幕府の蝦夷地調査は、北海道本島地図にも一大飛躍を見せ、寛政末期以後の直轄期に、科学的正確さをもつ伊能・間宮図を生み出したとしている。(97~98頁及び、126頁)。

2. 松前藩政期の絵図

絵図・地図に「クスリ」の記載がみられるのは、『正

保日本図』(正保元年 1644)が最初である。本図は幕命により松前藩が提出した絵図をもとにした、国内作成の最初の蝦夷地絵図とされている。

松前藩は寛永10年、同12年の二度にわたり、松前・蝦夷地の調査を行なった(『松前家記』)。初の藩領域及び蝦夷地の実測で、領域及び全島にわたる支配権確立の意義をもつ(海保 1978)。幕府より藩へ御国絵図提出の命があった時、この調査結果をもとに作図したとみられる。また、その後の御国絵図を集めた『元禄日本図』(元禄15年 1702)にも影響を与えたことが指摘されている⁽²⁾。

正保図に「クスリエソ」、「シラヌカエソ」とある。襟裳岬より厚岸までが一湾に描かれ、「小舟の間」とある。産物の記載は渡島半島東部に昆布、噴火湾にラットセイ、厚岸に真羽(鷺羽)。陸路は松前地の海岸部のほかは石狩~勇払低湿地に限られる、などの特徴がある。

藩は寛永期の調査後、寛文元年にも調査を行ったという(『新選北海道史』第二巻通説一)。『元禄日本図』は寛文期の調査より40年余を経たのち作られた、藩作成の第二図にあたる。しかし、陸路が全島にめぐらされ、山岳五峯が加わるなどの点は新しいが、形状や記載事項など、大きな差異はない。「クスリエソ」「シラヌカエソ」はそれぞれ「クスリ」「シラヌカ」と記載されている。幕府が蝦夷地を調査する天明期以降までの間に、松前藩が作製した地図は、この2点である。これを補うものとして、次の3点を掲げておく。

M. G. Veries が厚岸湾に停泊し調査を行った時の地図(『航海所製図』)には「Goutsiaer」、「Cyrarca」、「Santanel」と記載され、釧路川、白糠、尻羽岬に比定される。また、航海長 Coen の名付けたものとして、「Sivarcia」、「Blauwe berg」「Batavias bergh」があり、白糠、雌阿寒岳、雄阿寒岳に比定されている⁽³⁾。

「松前之図」は、寛文9年に日高アイヌを中心とした蜂起による事件に関わるもので、津軽藩関係者が作製したと伝えられる。同事件で遭難した船・人数が場所ごと

* 釧路市埋蔵文化財調査センター

表-1 クスリ場所関係絵図の概要

番号	図題	作者	編・刊行年	版種	彩色	用紙	形態	規格	所蔵者	掲載図内訳	参照文献名
1	正保日本図	幕府撰	正保元年	手写	彩色	和紙	折畳1鋪	227.5×253.7	秋岡武次郎	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
2	元禄日本図	幕府撰	元禄13年	手写	彩色	和紙	折畳2鋪	114.5×185.5 115.8×140.0	秋岡武次郎	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
3	ド・ノリス 航海所製図	M.G.Vries	西暦1858年	銅版	彩色	洋紙		50.5×60.0	函館図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
4	蝦夷全国	—	寛文7年	手写	彩色	和紙	折畳1鋪	72.0×79.0	東大図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
5	松前之図	—	寛文9年頃	—	—	—	—	—	—	高倉・桑田 北海道本 島地図の変遷(引)	高倉・桑田 北海道本 島地図の変遷(引)
6	松前夷人嶋絵図	—	—	—	—	—	—	—	村岡典嗣	同上	同上
7	蝦夷之図	寺島良安	正徳2年	木版	単色	和紙	綴本2頁	20.6×30.5	内閣文庫	相模三村絵図(上)	相模三村絵図(上)
8	蝦夷国全国	林子平	天明5年	手写	彩色	和紙	軸1巻	110.3×78.8	北大図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
9	三國通覧と地路程全 図	林子平	天明5年	木版	彩色	和紙	額入1枚	83.0×59.0	釧路図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
10	蝦夷図	古河吉松軒	天明8年	手写	彩色	和紙	軸1巻	110.3×78.8	北大図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
11	蝦夷松前図	—	寛政年間	木版	彩色	和紙	折畳1鋪	45.8×33.5	—	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
12	東山道陸奥松前五島 及万州掌覧之図	—	寛政元年頃	手写	彩色	和紙	軸1巻	97.0×109.0	北大図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
13	松前夷地図	—	寛政初年?	手書	彩色	和紙	軸1巻	93×88	北大図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
14	野作国全国	—	寛政初期	手写	彩色	和紙	折畳1鋪	—	武川久兵衛	—	—
15	蝦夷地湖絵図	—	天明5年~寛 政期	木版	彩色	和紙	折畳1鋪	96.0×114.5	北大図書館	—	—
16	蝦夷地海路写図	—	寛政末期?	手書	彩色	和紙	折畳1鋪	81.0×78.0	北大図書館	—	—
17	蝦夷古地図	—	寛政年間	木版	彩色	和紙	額入1枚	115.0×76.0	釧路図書館	—	—
18	蝦夷地之図	—	文化初年?	手書	彩色	和紙	折畳1鋪	91.0×124.0	北大図書館	—	—
19	蝦夷奇勝図巻	谷元旦	寛政11年	複製	多色	—	帙入	30.0×42.0	釧路博物館	シヤクマカ・ククリ・セシボウシ 西蝦夷之図・ククリ川漁場・ククリ川成陸望 之図・ククリ川眺望之図	蝦夷奇勝図巻
20	東蝦夷廻浦略絵図	—	寛政11年	模写	彩色	和紙	軸物1巻	10.0×150.0	釧路博物館	—	—
21	クスリ会所島嶼図	—	文化年間	手写	彩色	和紙	額入1面	50.0×65.0	釧路図書館	—	—
22	蝦夷地図式 乾	近藤重蔵	享和2年	手写	彩色	和紙	折畳1鋪	89.5×74.5	函館図書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
23	東西蝦夷地図(仮称)	—	文化初年	模写	彩色	和紙	軸物1巻	80.0×82.0	北大図書館	—	—
24	松前絵図	岡部牧太	文化3年	手写	彩色	和紙	軸物1巻	160.0×153.0	北大図書館	—	—
25	国後与里箱館 陸地道中絵図	横山隆福	文化7年	写	彩色	和紙	折本3冊	—	函館図書館	久寿里・白糠・昆布無以 セシボウシ・ククリ	—
26	松前蝦夷地嶋絵図	村山直之	文化13年	模写	彩色	和紙	三葉紙	108.0×136.0 136.0×136.0 136.0×136.0	北大図書館	—	—
27	文化庁蝦夷地 藻々測量図	—	—	手写	—	和紙	軸物2巻	—	函館図書館	—	—
28	蝦夷国測量図	伊能・間宮	文政4年頃	模写	彩色	和紙	軸物1巻	120.0×130.0	北大図書館	—	—
29	蝦夷國境輿地全国	藤田良	嘉永7年	複製	彩色	和紙	折畳1鋪	115.5×91.6	釧路博物館	—	—
30	改正蝦夷全国	豊島毅	嘉永7年	木版	彩色	和紙	折畳1鋪	53.3×41.8	東大附属図 書館	北方領土 古地図と歴史	北方領土 古地図と歴史
31	蝦夷地全国	喜多野省吾	嘉永7年	木版	彩色	和紙	軸物1巻	70.0×108.0	北大図書館	—	—
32	松前蝦夷地図	—	—	木版	彩色	和紙	折畳1鋪	—	青森県図書館	—	—
33	東西蝦夷 山川地理取調図	松浦武四郎	安政6年	複製	彩色	和紙	折本28冊	510×374	釧路博物館	青森県図書館	—
34	東蝦夷日誌	松浦武四郎	慶応元年 明治11年	木版	無彩	和紙	綴本8冊	25.0	北海道立図	釧路会所前の図	—
35	東蝦夷私筆	成石修	安政4年	手写	無彩	和紙	綴本6冊	26.0	函館図書館	久寿里図・白糠石炭産図	—
36	東蝦夷夜話	大内餘庵	文久元年	木版	無彩	和紙	綴本5冊	26.0	釧路図書館	クスリ会所の図 メシカラン館跡の図	—
37	東蝦夷図巻 乾	—	安政4年	手書	彩色	和紙	巻物1巻	27.0	北大図書館	シタマカ、クスリ、セシボウシ	—
38	北海道歴検図	日賀田守盛	明治4年	手書	彩色	和紙	折本28冊	27.0×23.0	北大図書館	釧路州(上、下)	—
39	蝦夷日誌	松浦武四郎	嘉永3年	手写	無彩	和紙	綴本35冊	26.0	函館図書館	高倉・桑田 北海道本 島地図の変遷(引)	高倉・桑田 北海道本 島地図の変遷(引)
40	竹四郎廻浦日誌	松浦武四郎	—	手写	無彩	和紙	綴本30冊	26.0	北大図書館	—	—
41	罕有日記	森・馬	安政4年	—	無彩	和紙	綴本1冊	26.0	函館図書館	仙臺寺通行屋真景	—
42	東蝦夷地 クスリ場所之図	—	—	手書	彩色	和紙	折畳1鋪	43.0×32.0	函館図書館	—	—

に記載されている例で、「シラヌカ 蟻崎蔵人 船一艘 人数十四人」「前田九郎左衛門 船一艘 人数十二人」とある。内容が『津軽一統志』などと異なっているが、真相のはっきりしない騒動の最中に、噂によって書かれたものと推定されている⁽⁴⁾。当場所に関する情報として詳しく書き込まれた最初の地図であるばかりでなく、寛文事件に関わる目的をもった地図として興味がある。

『和漢三戈図会』所収の『蝦夷之図』は、国内で最初に刊行された蝦夷地絵図である。南北に細長い絵図で「クスリ」「シラヌカ」のほか「葉ヶ嶽」の記載がある。寛文3年に彫られた円空作仏像薬師像（釧路市 厳島神社蔵）の背面に、「くすり乃たけごんげん」の銘文のあることが知られている。

さきの『元禄日本図』の山岳五峯のひとつに「葉嶽」とあらわれており、道南で寛文期に「くすりのたけ」と知られ⁽⁵⁾、元禄・正徳期になって、地図上に記載されることとなった。

これまでの時期の地図では、最東端の交易場が厚岸であることを反映し、太平洋岸の厚岸までの海岸線については比較的明確に記載されている。この場合「クスリエソ」などの記載に見られるように、原住民の勢力圏をもつ地として記載されており、舟着、舟澗など海路交通の上から見た作図のなかで、当地方が描かれている。

- (1) 海保嶺大『幕藩制国家と北海道』（三一書房）84頁。寛永10、12年の領内測量や地図作製を一種の検地ととらえ、北海道アイヌの島内緊縛体制確立を踏まえ、商場宛行いを間接的に示めたものとする。
- (2) 高倉新一郎・柴田定吉「我が国に於ける北海道本島地図の変遷（一）—北日本地図作製史 第三報—」（北海道帝国大学 北方文化研究報告 第六輯1942年）。10頁
- (3) 前掲書 66—69 P
- (4) 前掲書 38 P。本図については、海保嶺大氏も引用されている（『寛文九年の蝦夷峰起と商場』、『北海道開拓記念館研究年報』第一号 1972年）。昭和59年に所蔵先の県立青森図書館で発見できず本図については、両報告の記載によった。なお『北方領土—古地図と歴史—』では作製年代享保16年、弘前市立図書館蔵の地図が掲載されている。
- (5) 本像の釧路への伝播過程については、長谷川公茂『円空仏』（保育社1982年）によった。

3. 天明～文化期の幕府調査と絵図の作製

(1) 天明期前後の絵図

天明5、6年、幕府は蝦夷地調査に着手した。対外問題もあるが、属島・金銀山開発、交易など新たな財源獲得のうえから、蝦夷地が新たな探検・調査の対象となったためである。この時期の本場所と関係する地図は、次の三つのタイプに分類できる。

その1は場所請負商人の残した図である。奥地場所を一括請負した飛騨屋武川久兵衛家に伝わる絵図である。その2は蝦夷地開発論者の手になるもので、そのひとりとして林子平により作製された絵図である。その3は幕府役人らによる調査や見聞をもとに作成した絵図である。幕府が自から蝦夷地に関心を寄せ、実態把握と蝦夷地政策に取り組む動きが具体化した時期である。蝦夷地絵図

の作製目的がひろがり、やがて伊能・間宮図など正確な実測図をうみだす前史をなすのが、この時期である。

『野作国全図』（寛政期）は飛騨屋で知られる武川家所蔵資料である。この図の特徴は船着場適地の地名が具体的に記載されているところにある。正保図や元禄図では湾らしき地形をとらえ「舟澗」の表示であったが、本図では、「クスリ」「子モロ」「ピロー」などに掛澗を示す▲印が付されている。商品輸送の拡大を背景に、積み出し適地への関心が高まったことによるのであろう。このころ『蝦夷地澗絵図』（天明～寛政期 北大蔵）という図も作製されている。

林子平の作製図については、『蝦夷国全図』（天明5年1785）『三国通覧与地路程全図』（同 釧路市立図書館蔵）を比較しながら検討する。北海道島の形状は南北に長く、恵山・襟裳・納沙布岬がほぼ横一列に描かれている。従来の絵図とことなるのは、海路の距離が記載され、襟裳岬～キイタツ間、78里となっている。襟裳岬から尻羽岬へは湾状に表現され、「トカチ」「砂金多」、「クスリ」「クスリ嶽」、「ベッサブ」、「シリハ」「シリハサキ」の記載があり「此入海皆アッケシノ支配」とされる現厚岸湾へ連なる。クスリとベッサブの間に川が描かれているが、図では石狩川上流の大沼に連なってしまう、正確度には程遠い。「アッケシ 此地大村多」、「キイタツはヨリ北へ日本船不行」などの情報が書きこまれている。本図は、白石の『蝦夷志』や、坂倉源次郎の『北海随筆』を参考とするなど、当時出版された、最も詳細な図で、影響力はたいへん大きかったという⁽¹⁾。

幕府調査にもとづく図として『蝦夷輿地全図』（天明5年）があるが、これにはクスリが登場しない。「エリモ」「アッケシ」「シリトコ」の記載があり、旧釧路川口にあたとみられる地点が、入江に描かれているものの「クスリ」の記載はない。また、蝦夷地調査により作製した絵図を刊行したものが『松前蝦夷図』である⁽²⁾。本図ではトカチ、クスリ、アッケシ及び野付半島基部に運上屋の表示がある。『蝦夷拾遺』という調査報告書では、シラヌカに2戸、キイタツに1戸の記録があるが、地図上では表記がない⁽³⁾。白糠については川（茶路川か）を書きこんであり「クスリタケ」の西の山の山頂より流出した書き方である。『東山道陸奥松前千島及方州掌覧之図』になると、北海道東部についてやや詳しく書かれるようになる。エサン・エトモ・エリモの崎が強調して書かれ、海へ大きくはり出して描かれる。帆走の目標となる崎である。大間～箱館航路、津軽海峡よりクスリ、アッケシ、ノサップへの航路が書きこまれているなど新しい要素である。またクスリよりアバシリ～トコロ、アバ

シリ〜シャリへの陸路、センボウシよりアッケシを経て、アンネベツを経由する内陸路、ビワセを経由する海岸路も書かれている。オホーツク海岸へ出る分岐点としてクスリが、クナシリ、ノッカマップへ至る道筋としてアッケシが重視されるようになったことを、示しているの(4)であろう。

(2) 幕府直轄による調査と絵図の作製

寛政11年正月、幕府は東蝦夷地を直轄し、直捌を実施した。蝦夷地内国化の措置である。蝦夷地の経営や調査のため、役人が派遣された。さらに、文化3、4年のロシア船による樺太、択捉襲撃で北辺の緊張が高まり、東北諸藩の藩士が警備のため来往した。(5)これらの情況は蝦夷地に関する記録を残す契機となったことは、言うまでもない。この時期に作成された絵図の特徴として、三つのきわだった点を指摘しておきたい。

その1は、この時期になり初めて蝦夷地の実測図が作られるようになったことである。周知のごとく、伊能忠敬は、寛政12年に松前から西別へ至る東海岸を実測した。さらに間宮林蔵が補い、『蝦夷国測量図』（文政4年1821）が完成する。北海道の形状が正確に描かれ、また緯経線のうえに位置づけられるようになった。その2はこの地域の地図に限らず、俯瞰図や景観図が描かれるようになり、施設の配置や集落の立地についてより詳しい具体的な資料が残されるようになったことである。その3は、幕府政策のなかで陸路・海路の整備が進んだことによって、交通施設に関する情報を重視した絵図が多くなったことも指摘できる。

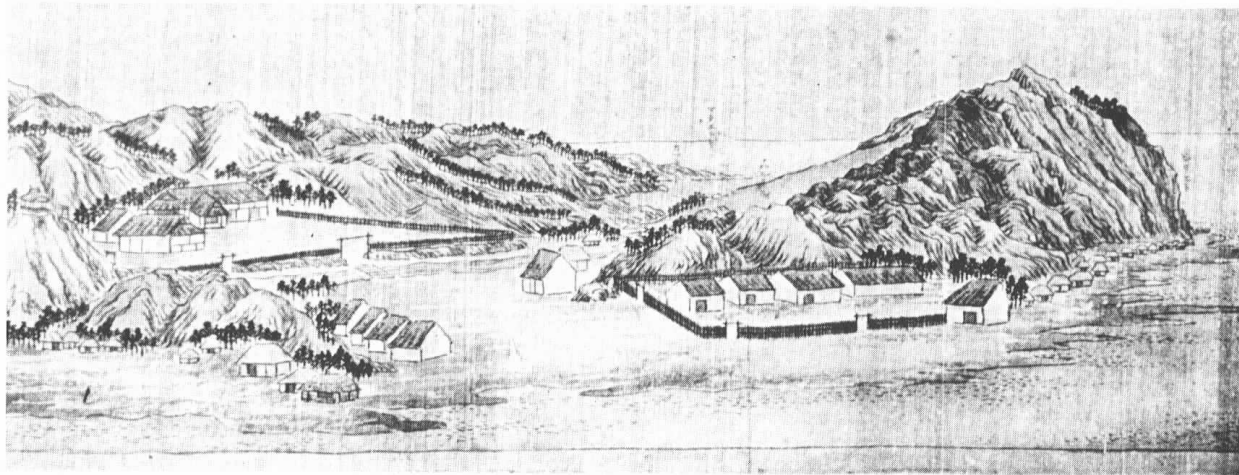
さて、伊能図に北海道東部をみると「ヒーロー」「ヲコッナイ」「クスリ」「コンブムイ」「アッケシ」「ノッシャム岬」「ネモロ」「ニシベツ」の地名と雄阿寒、雌阿寒、羅臼岳の記載がある。詳しい地名はないが、雄阿寒、雌阿寒を基点にヒーロー、クスリ、アッケシの位置を正確に

はかった図である。むしろ、この地図が近藤重蔵や松浦武四郎の作図に及ぼした影響のほうが重要であろう。

『蝦夷地図式 乾』（享和2年 1802）が近藤重蔵の作であるものか、疑問を寄せるむきもある。(6)それはともあれ、本図は、釧路川や阿寒川の形状と位置が正確に表現されている。また、直別・音別・茶路・大楽毛川や、厚岸の別寒辺牛など小河川の記載がみられる。海岸線の地名は、クスリ場所関係では「テクベツ」「ウンベツ」「シラスカ」「ヲタノシケ」「クスリ」「カツラコイ」があり、河川のほか、昆布漁場の設定された桂恋が記載されるようになった。

釧路市立図書館蔵の『仮称蝦夷之図』は網走山道と斜里山道、それに仙鳳趾から厚岸へかけての内陸路が記載されている。本図は他の場所域でも内陸路の記載が詳しいという特徴が見られる。網走山道や仙鳳趾〜厚岸間の道路は文化5年以降の造作とされているから、作製年代もこの時期以降であろう。勤番所、臺場、運上屋、番屋船澗の凡例が設けられたこの図は、やがて嘉永期刊行の地図につながる。勤番所以下の凡例の記入状況からみると、当時の厚岸が行政、流通、警備の中心であったことを物語っている反面、釧路は船澗の記載もなく運上屋と内陸路の分岐点であったことを示すにすぎない図である。

クスリ場所の海岸図や、会所元・交通施設（旅宿・継立所）所在地などの詳細な景観・俯瞰図について、4点を確認している。函館市立図書館蔵の『東蝦夷廻浦略絵図』のクスリ場所の部分、小助川濱雄が模写したものを本館で所蔵している。西はコンブカルイシより、東はモセウシまで、クスリ場所の海岸線をスケッチしたものである。いっぽう谷元旦と檀山隆福によって、クスリ場所の集落の状況を伝える詳細な絵図が残された。元旦は寛政11年6月19日、シャクベツの旅宿所着、20日シラスカに止宿したあと、アッケシまで赴いたのち、帰路に



クスリ湾眺望之図（部分） 谷元旦 蝦夷奇勝図巻（佐藤家旧蔵本）

ついで⁽⁷⁾『蝦夷奇勝図巻』(佐藤慶二家旧蔵本)は、主要な集落の景観を眺望したもので、その一部を佐藤慶二氏編著のカラー複製版にて見ることができる。同氏の解説によれば、116景あるうち27景を収めたとされる。本場所関係では「シャクベツ番屋之図」「シラヌカ番屋ヨリ東西眺望之図」「クスリ川渡場ヨリ舍利越眺望之図」「クスリ湾眺望之図」の三景四場面よりなる。本図の特長は、会所元、シャクベツ、シラヌカの集落景観が内陸から海側へむかって描かれている。このなかで、周辺の山岳、丘陵、出崎、砂州、河川などにも地名が付されている。絵中の建物については名称が付されていないことと、寛政11年時の施設についての他の記録類がないので正確に比定しがたいが、集落の景観を示めすうえで興味ある資料である。

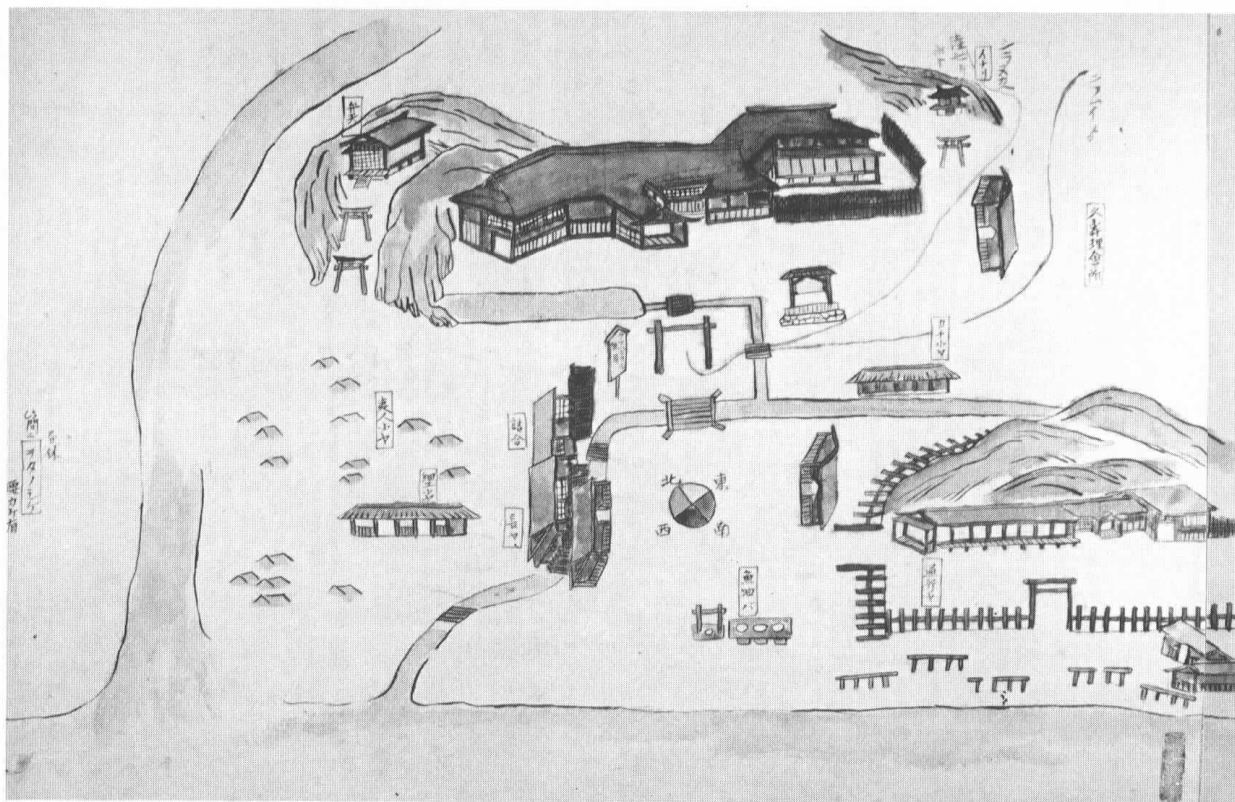
『国後与里箱館陸地道中絵図』は南部藩士、檜山隆福が国後へ出張し、盛岡への帰路、箱館までの道中を描いたものである。折本三輯からなる。解題によれば、隆福は文化6年10月、国後での勤番を命ぜられ、翌7年3月28日に盛岡を出発した。佐井より国後へは舟路によるよう命令されており、5月6日国後へ着津した。7月28日に国後を出発し、帰路は陸路を命ぜられたところから、その道中記録として本絵図が残されたものである。国後

表-2 文化期のクスリ場所会所元施設の記載比較

史料名 施設名	場所様子大概書		東行漫筆		陸地道中絵図
	梁間	桁行	梁間	桁行	
会所	6	13	8	13	1棟 (2棟が棟続き)
元会所	6	10	2	10 ^{註1}	
旅宿所	2	13	2	13 ^{註2}	1棟 (通行屋の称) (3棟が棟続き)
旅宿所	2	3.5	—	—	
元旅宿所	6	10	6	10 ^{註3}	} (板蔵2棟あり)
元旅宿所	4	10	4	10 ^{註4}	
仕入物蔵	5	10	5	10	} (板蔵2棟あり)
産物蔵	3	10	3	10	
産物蔵	4	8	4	8	} (板蔵2棟あり)
塩蔵	4	8	4	8	
鍛冶家	10	3	3	2	1棟 (草葺小屋)
細工小屋	—	—	7	3	1棟 (草葺小屋)
酒造家	1棟	—	1棟	—	—
酒造土蔵	1棟	—	1棟	—	—
魚油場	—	—	—	—	1カ所 (草葺小屋2棟あり 細工鍛冶小屋)
草葺小屋	3棟	—	3棟	—	稲荷
社祠	稲荷	—	稲荷	—	弁天
社祠	弁天山神	—	弁天山神	—	—
詰合	—	—	—	—	1棟 (他に長屋2棟)
制札場	—	—	—	—	1カ所

表中の()は筆者註記

- 註1 当時旅宿に成又は御仕入物入置、是は元運上屋のよし
 註2 是は、惣内詰合之節出来 (寛政11年 筆者註)
 註3 元運上屋之時分より有之
 註4 元旅宿所、潰に付当春取建直し



久寿里会所 檜山隆福 国後与里箱館陸地道中絵図 (函館市立図書館蔵)

のトマリ（会所元）にはじまり、現在の根室・風蓮沼・姉別・茶内・厚岸・仙鳳趾・初無敵・昆布森・釧路・白糠・尺別と続き、当時の施設の配置がうかがえる資料である。今、これとほぼ同時期の記録として『東蝦夷地各場所様子大概書』や『東行漫筆』があり、会所元を中心に検討しておこう（表一2）。『大概書』は在勤役人の作成した報告書であり、『東行漫筆』と橋山多福の絵図は出張役人の報告書という性格の相違がある。絵図には「小ヤ」「長ヤ」と書かれ、産物蔵仕入物蔵と特定できない部分があったり、酒造家など本来当然もこまれるべきもので、記録されていないものがある。建物の梁間と桁行など、必ずしも実際の規模にあわせて記録しているわけではなく、絵図から建坪を算出するのは困難なようである。にもかかわらず、建物の配置についてあらまし理解できるという点での意義は大きい。この時期を代表する絵図を比較したが、ようやくクスリ場所についての景観が、具体的に明らかにされることになった。また北海道島における釧路の位置も正確に示めされるようになった。幕府が蝦夷地政策に積極策を取った所産である。

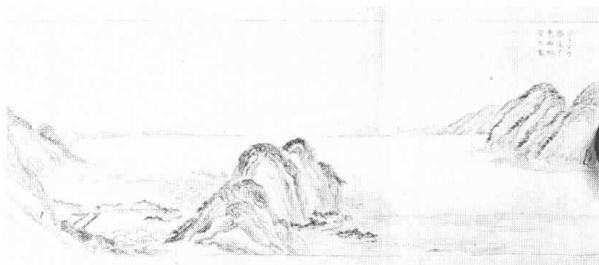
- (1) 室賀信夫『古地図抄—日本の地図の歩み』（東海大学出版会 1983）、高倉・柴田（1952）前掲書
- (2) 北方領土問題調査会編『北方領土—古地図と歴史』（中央社 1971）
- (3) 『北門叢書』複製版（1972）、第一冊 262頁
- (4) 斜里山道、網走山道の開さくにより、太平洋岸～オホーツク海岸の連絡路が創設された。これよりさき、享和元年松本伊豆守の一行が、斜里から釧路へ通行している。このルートは旧来、踏みわけ道として活用されていた。（拙稿「クナシリ、エトロフへの道」『新釧路市史会報』第16号所収）
- (5) 事件後、東北諸藩による蝦夷地警備が強化された。文化5年南部・津軽

各250名のほか、仙台・会津も出兵した。南部は箱館、国後、択捉を守り文化11年まで出兵している。仙台藩は2,000名の藩士を送り箱館・国後・択捉を守った。

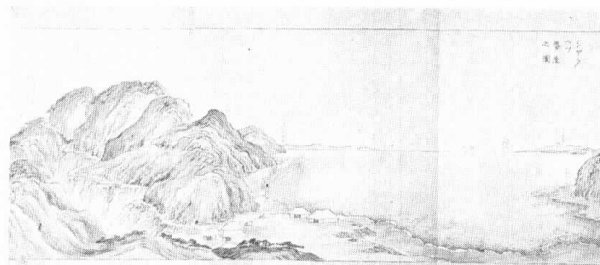
- (6) 高倉・柴田（1952）前掲書 119～120頁
- (7) 谷元旦『蝦夷紀行』（釧路叢書 『釧路関係日記古文書集』 1961 所収）佐藤慶二選『蝦夷紀行』（1973）には、谷元旦の業績について紹介されている。

4. 箱館開港による蝦夷地調査と絵図

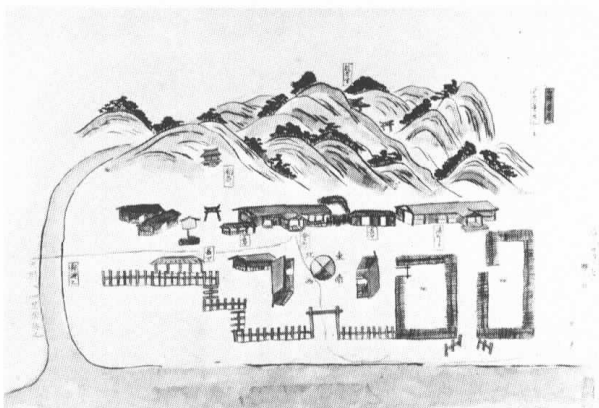
『東西蝦夷山川地理取調図』が安政6年4月完成し、跋文によれば、同年12月刊行のはこびとなったのであろう。⁽¹⁾この地図の完成によって、海岸部の地名が著しく豊富に採録されただけでなく、内陸部の地名が詳しく採録され、その位置を確認できるうえでも、優れた絵図が作製されたことである。これより先、嘉永7年に『蝦夷闔境輿地全図』が江戸・播摩屋勝五郎から刊行された。本図によれば、旧来の地図に比べ海岸線の地名の採録がやや増えたものの、内陸については河川・山岳名が中心である。『蝦夷闔境輿地全図』に採録されたクスリ場所の海岸地名は、「チクベツ」「ジャクベツ」「ランベツ」「チノミ」「ハシクロ」「サルベツ」「シラスカ」「サシイシベツ」「ショロベツ」「ヲタノシケベツ」「ヘトマイ」「クスリ川」「船掛り澗」「クスリ」「ウラルマイ」「ヘツシャブ」「フヨマイ」「マタエトキ」「チョロベツ」「コンフマイ」「トマチセ」「サツコシ」「シリハ」「センハウシ」で、旧来の地図に比べ、地名の採録は多くなっている。それでも、『東西蝦夷山川地理取調図』の同じ地域で採録さ



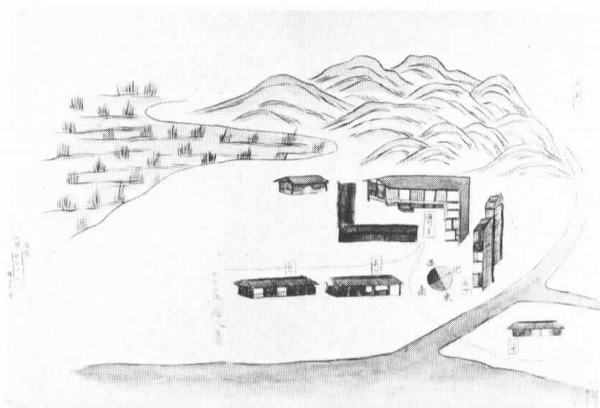
シラスカ番屋ヨリ東西眺望之図（谷元旦）



シャクベツ番屋之図（谷元旦）



白糠番屋（橋山隆福）



尺別（橋山隆福）

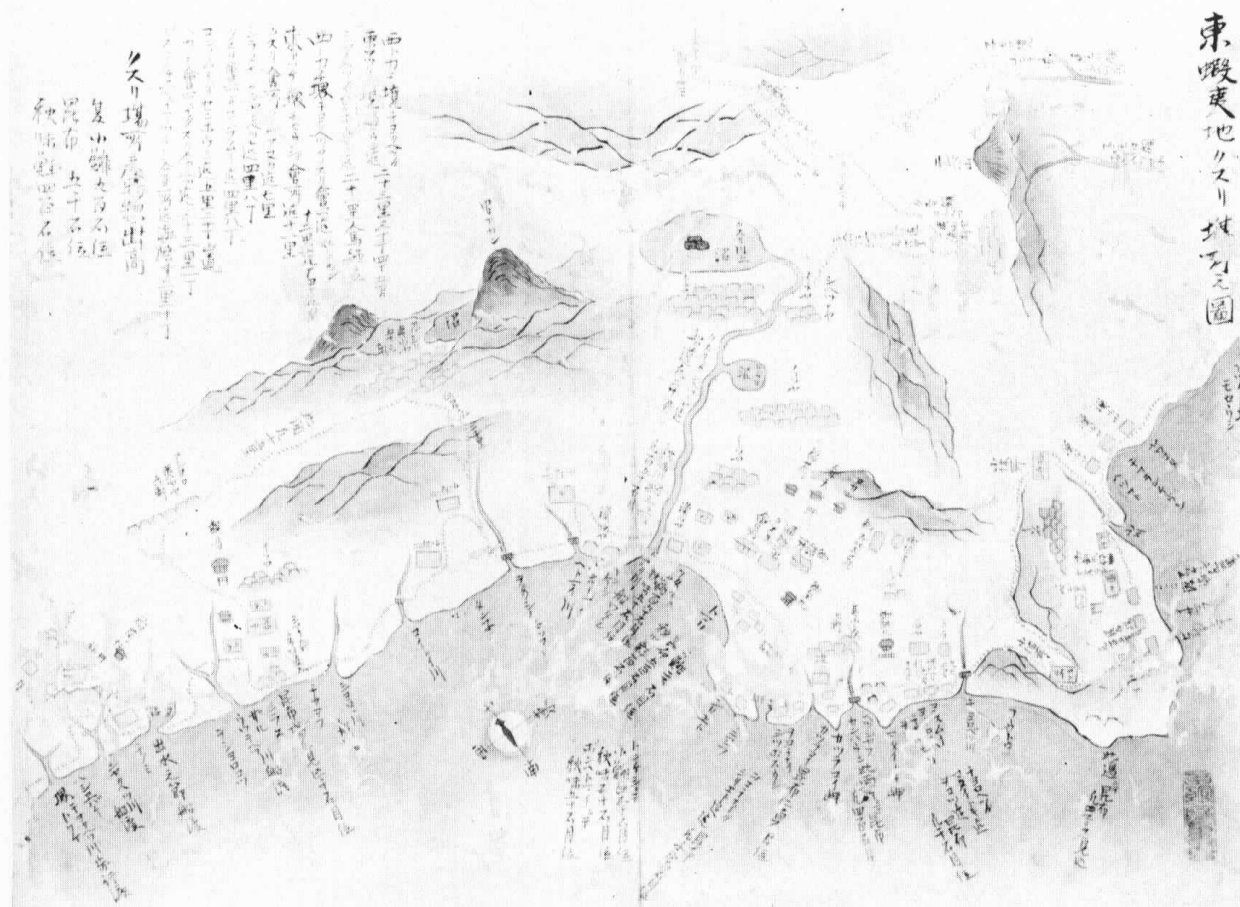
れた100件の地名には、はるかに及ばない。さらに松浦は「蝦夷家」「舟澗」のほか「夷人出稼所」の標示（ヤウコタン、モセウシ、ハルトル）、安政3年以前と以後の開発道路も区別をしている。

日米和親条約に調印（安政元年3月）し、箱館が開港場となった。蝦夷地は再び幕府に直轄されることになり（安政2年2月）、幕府は雄藩へ蝦夷地調査をすすめた。これを受け、福山・佐倉・関宿・長岡・村上・仙台・佐賀藩らが藩士を蝦夷地調査に派遣している。これによる報文が残されたものの紀行文であり、松浦の調査は詳細と正確さのうえで群を抜いている。

クスリ場所の会所元俯瞰図は、5点ある。⁽²⁾いずれも安政3年から5年にいたる調査記録の掲載図である。寛政11年及び文化6年時の絵図と対象できる。これまで海岸線に位置する主な集落（陸上交通路のうえでの）の絵図に限られていたが、この時期になって、釧路～斜里間の内陸の絵図も残されることになった。『松浦竹四郎廻浦日誌』のなかに掲載されているもので「ヲタウニ」「ルーチシ」「ワッカウイ」「クスリ領ケネワッカ眺望」など内陸の場所境や峠の景観図が加わっている。また、内陸

交通に関わる絵図が中心であったのに対し、「白糠石炭窟」（『東徼私筆』掲載）や「メンカクシ館跡の図」（『東蝦夷夜話』掲載図）など絵図の対象が拡大した点も見落せない。安政4年より白糠・石炭岬で道内初の石炭採掘が行なわれ、箱館開港後、入国する外国船に対し石炭供給を開始した（元治元年に採掘中止）。「白糠石炭窟」が書き残された背景について見れば、クスリ場所の新しい役割が、絵図にも反映されていたと見ることができる。

最後に函館市立図書館蔵『東蝦夷地クスリ場所之図』について検討したい。本図の作者及び作製年代は不明である。同手法の絵図として、クナシリ、アッケシ、ユーフツ、エトロフらの絵図が同館に所蔵されている。梅木通徳氏の『蝦夷古地図物語』（1975年再版）のなかに、『蝦夷地交易請負場所全図』という「一卷二四葉にわたる切り図」が紹介されている。⁽³⁾とりわけ『東蝦夷地ユウフツ絵図』は、表現方法・記載内容についてたいへん類似している。作製時期についてである。産物量が「夏小鯉九百石位、夏昆布五千石位、秋味鮭四百石位」とあるところから、当時のクスリ場所の昆布出産額の推移と比較すると、箱館開港後のものということになる。この地



東蝦夷地クスリ場所之図 函館市立図書館蔵

図によって示されることは (1)漁場の位置と生産量 (2)集落ごとの主要な施設 (3)内陸交通路と、交通路沿いのコタン間の距離 (4)集落によっては戸数の記載などがあり、場所の概要を記載している。箱館開港はいっばうで白糠の石炭山を開掘し、他方で北海道東部を輸出用昆布の移出地帯にかえていった。場所の産物や漁場の位置、場所間の往来について、関心が高まってきたことに対応した地図と見ることもできる。

- (1) 松浦竹四郎『東西蝦夷地理山川取調図』(複製本) (IK 企画 1983)
 (2) 表一 1 34番より38番の5点。このうち『東蝦夷図巻』は仙台藩の警備に加わった画家の作品とされる (『北海道大学北方資料室所蔵北海道関係地図・図類目録』)。

5. む す び

本邦北方地図作製史の研究として、第二次世界大戦から、戦後にかけ発表された、高倉新一郎、柴田定吉の一連の業績がある⁽¹⁾。この場合、整理の視点は、次の4点を指摘できよう。(1)北海道島及び樺太島、千島諸島の形状と配置 (2)千島・歯舞・色丹群島の島数、形状 (3)中国大陸、樺太島間の海峡の存否 (つまり間宮海峡の認識過程) (4)北海道島内陸の河川、山岳の位置と内陸路の発達。この成果は幕藩体制国家の支配領域の編入過程の証左として、領土権主張のひとつの根拠となっている (『北方領土—歴史と古地図—』1975など)。

絵図・地図が文書とともに、地域の歴史過程を個別具体的に解明する素材であり、本稿は高倉氏らの問題意識とは別に、地図・絵図を通じクスリ場所がどのように描かれているかを検討した。

従って、(1)交易対象範囲と交易施設 (2)交易所が厚岸・霧多布・国後へ移動することに伴う、蝦夷地奥場所の情報増加量 (3)商品輸送量の増加に伴う海上輸送路、潤に関する情報の増加量 (4)蝦夷地警備のための施設と兵員輸送路としての陸上交通路の記載 (5)場所境及び地域別産物生産量などに着目しつつ、地図の作製変遷史をたどることにした。

松前藩成立後、18世紀初頭までに、藩は三度の島内調査を行っている。この調査は、正保、元禄期の御国絵図に影響をあたえた。しかしこの二つの地図を通じ得られる蝦夷地の理解の範囲は、交易対象である、原住民の存在と勢力位置を知らせる程度にとどまっている。松前藩が北辺の小藩であったことよりも、松前藩が和入地と蝦夷地を分断支配する、その政策のもたらしたものである⁽²⁾べきであろう。

天明5、6年の幕府による蝦夷地調査以降、とりわけ寛政11年から文化6年前後までの期間は、太平洋岸(東蝦夷地)について幕府関係者による詳しい調査報文の残された時期である。このなかで詳細な集落景観図が描か

れるようになった。このことは文献を通じてしか記録されていない、集落の位置・景観を詳細に伝える。また、実測により正確な形状・位置を示す地図の作製された時期であるが内陸路の調査もすすみ、釧路川や内陸路が正確に描かれるなど、釧路の内陸を視野におさめた絵図作製の時代にはいる。

幕府主導による蝦夷地調査は、松前藩復讐によって一段落するものの、箱館開港後にも再開されこれを受けて絵図・地図の作製が多くなる。このなかで松浦武四郎の調査は海岸のみならず内陸における地名の採取と、これを伊能・間宮測量図に落としこんだことによって、正確な位置の記録が残されることになった。また場所境や峠、山岳など、クスリ場所について、これまでの海岸線だけでなく内陸の景観も残され記録の範囲が拡大した。漁場図が作られ昆布、魚粕産地が明瞭になるなど、絵図作製の目的が多面になってきたことも見逃せない。

ここでは、蝦夷地政策の推移と絵図作製の変遷を、釧路地方を中心に考察したにすぎず、個々の絵図・地図について、相互に比較検討を加え、史料としての信憑性と限界について考察したわけではない。史料批判の取り組みについてこれまで十分検討されてきたとも思えない。寛政～文化期、安政期は紀行文が多いとはいえ、報文の比較的残されている時期である。後日、別稿を起すこととしたい。

本報告をとりまとめるにあたり、函館市立図書館、北海道大学附属図書館、青森県立図書館、釧路市立図書館を通じ、史料閲覧ならびに複製写真撮影の便宜を得た。また写真の撮影、使用にあたり加藤春雄氏(本館嘱託)を煩せた。記してお礼申し上げたい。

(1) 高倉・柴田(1942、1952)のほか、高倉・柴田「我国に於ける樺太地図作製史—北日本地図作製史 第一報—」(『北海道帝国大学 北方文化研究報告』第二輯 1939所収)、同「我国に於ける千島地図作製史—北日本地図作製史 第二報—」(同第三輯1940)、高倉「北海道地図の変遷—補遺—」(同第十一輯1956)がある。このほか地図の歴史に関するものとして、織田武雄『地図の歴史』(講談社 1973)、船越昭生『北方図の歴史』(同1976)を参考とした。

(2) 天保国絵図のなかに、松前藩提出の蝦夷図があるが未見である。他日の調査を期したい。